『舶来すみれ』の成立

大島　正

『舶来すみれ』はわが国で最初のラテン・アメリカ詩の訳詩集であるが、スペイン語から直接翻訳された最初のラテン・アメリカ詩集として珍重さるべき文献である。

この訳詩集の翻訳者は敬天牧童今村良治氏①で、明治三十六年三月二十四日に美育社（東京牛込区通寺町八番地）から出版された。

今村氏は明治八年十一月十日、京都府何鹿郡報恩寺村（現在福知山市）の出身で、明治二十九年九月、東京専門学校文学科入学までの略歴は次の通りである。

明治二十三年三月、綾部高等小学校を卒業して、翌年四月から二十五年八月まで、京都府加佐郡河守尋常小学校に授業生として奉職、二十七年二月から八月まで同郡高野小学校の臨時代理訓導となった。九月から大阪市の私立泰西学館第四学年に編入学した。翌年六月泰西学館尋常科を卒業したが、在学中は学館の夜学部と私立数理義塾で英語を教えた。そして翌二十九年英文学を志して上京、東京専門学校に入学した。

かれが英文学を志望したのは英語に習熟して、日本文学を海外に紹介したいと考えたからである。

入学後、たまたま上野の図書館で、官報を読んでいる中に外務省書記生試験の公告が目にとまった。この時、今村氏は日本で外国語を学ぶよりも、外地でやるほうが効果的で、日本文学の海外紹介という仕事もやり易いと考えた。きわめて、明治の書生らしい素朴な考え方であったが、書記生を受験してみることにした。同年十一月、東京専門学校を退学したが、試験には合格、三十四年四月、領事館書記生となり釜山在勤を命ぜられた。

しかし、朝鮮勤務では目的が達成されないので、外務省会計課長川崎寛美氏を介して、欧米語の通ずる国へ配置転換を頼んだ。幸いにも新米の書記生の願いが聞きいれられて、当時スペイン領であった比島マニラ在勤を命ぜられることになった。

そのころ、比島はリサール将軍などの独立運動がさかんな時で、物情騒然としていた。

この独立運動は若い今村書記生の血潮をたぎらせ、任地の事情を聞くにつれて英詩を朗読したり小説を読んだりすることに嫌気がさし、スペイン語に力を入れることになった。

そこで、マニラへ着任するまでの船中で英語によって解説したスペイン語独習書を一心不乱に読むようになった。

独習書を読んでいく中に、ヨーロッパ語とはいうものの、英語に比べて日本人にとって発音し易く、主語を省略したりするスペイン語に非常に興味をおぼえるに至った。

この船の中で比島人の医師と知合ったが、¿Es usted médico?（貴方は医者ですか？）とスペイン語でたずねたところ、Sí, señor.（ええ、そうです）とスペイン語で答えられた。

はじめて通じたスペイン語にいよいよ熱をあげるようになった。

当時、外務省で満足にスペイン語のできる人物は三浦荒次郎氏ただ一人といわれていたので、できるだけ早くこの人と同様にスペイン語を解したいと考えた。

任地マニラの領事代理が三浦氏であったが、あることからこの人と衝突、日本へ送り帰されることになった。

今村氏は日本帰着と同時に解雇されるはずであったが、川崎会計課長のとりなしで、やっと首だけはつながった。その時に解雇されない条件の一つにスペイン語がものになりそうだということがあったという。

明治三十一年十一月ごろ今村氏はメキシコの日本公使館書記生を命ぜられた。この時の公使は室田義文氏で、日本公使館には書記官一名、書記生三名がいた。

着任後もまだスペイン語が十分でない上に仕事のつごうで、三十三年までほとんど文学書になじめなかった。ちょうど、明治三十二年にペルー移民がはじまった。だが、この移民には複雑な問題がともない、移民が即刻日本へ帰国したいという願書を出すにいたった。当時、メキシコ在勤公使がペルー公使を兼任していたので、今村氏が実情調査のため、ペルーへ行くことになり、リマ名誉領事館在勤を命ぜられた。

面倒な移民問題も四年後には解決、今村氏にも余裕ができてきた。それから、リマ市内の古本屋漁りがはじまり、ラテン・アメリカの詩人の詩集に接するようになった。ここに『船来すみれ』が生れてくる機会があったのである。

今村氏は『船来すみれ』の原詩について、次のような書簡[2]を筆者によせておられる。

「詩集はメヒコからペルーへ転勤した時にはガルワンとアクニャとアントニオ・プラサと三人の詩集だけを携行しました。その外はリマ在勤中に一方には書店をあさり、他方には古書店を探して多くの詩集（皆、一人だけのもの）を買集めました。今世紀の初めにはガルニエー書店がイスパノ・アメリカの文学書を続々出版していました。マヌエル・アクニャとアントニオ・プラサの詩集は（出版書肆名記憶せず）仮製本でしたがガルニエー出版のものは各詩人について別々の一巻とし約四六版大で赤茶色の布表装表紙の題号などは黒で質素堅牢を主としたものでした。Eduardo de la Barra (Chile), Benjamin Blanco (Bolivia), José María Heredia (Cuba) の詩集はこのセリーズに属したものでした。

Clemente Althaus (Perú), Andrés Bello (Venezuela), Manuel Nicolas Corpancho (Perú), Joaquín Quintero (Venezuela), Ricardo Rossel (Perú) 等の詩集は古本屋を漁って集めたのでした。『舶来すみれ』出版後にイスパノアメリカの詩人数十名の作詩を一大巻に集めた Lira Americana があることを知りました。そして私の蒐集の労多くして効少かりしことを知りました」

この書簡において判るように「舶来すみれ」の中にみられる主な詩人の詩集を今村氏はもっていたが、詩集文庫 (Biblioteca Poética Garnier 1889) 中米名家詩集 (Colección de Poesías de los Mejores Poetas de la América del Centro 1888) なども持っていたので、訳詩はこれらの詩集から適当に翻訳し易いものから選んだと今村氏自身が語っている。

『舶来すみれ』の表紙は草色、左端に濃い水色のすみれの花、右にかけて円く世界地図が薄桃色でえがかれている。二二一頁で、末尾にスペイン語の目次を四頁つけている。この中に収められている詩は三十四篇であるが、詩人を国別にすると次のとうりである。

キューバ　一　ホセ・マリヤ・エレディア (José María Heredia)

メキシコ　四　マヌエル・アクーニャ (Manuel Acuña) ホアン・デ・ディオス・ペーサ (Juan de Dios Peza) イグナシオ・ロドリーゲス・ガルバン (Ignacio Rodriquez Galván) アントニオ・プラーサ (Antonio Plaza)

グァテラマ　一　ホセ・ミーリャ (José Milla)

コロンビヤ　二　フリオ・アルボレーダ (Julio Arboleda) グレゴリオ・グティエレス・ゴンサレス (Gregorio Gutiérrez Gonzáles)

ベネズエラ　三　アンドレス・ベーリョ（Andrés Bello）ドミンゴ・ラモン・エルナンデス（Domingo Ramón Hernández）ホアキン・キンテロ（Joaquín Quintero）

エクアドル　一　ホセ・ホアキン・デ・オルメド（José Joaquín de Olmedo）

ペルー　六　クレメンテ・アルタウス（Clemente Althaus）マヌエル・ニコラス・コルパンチョ（Manuel Nicolás Corpancho）ヌマ・ポンピリオ・リョナ（Numa Pompilio Llona）マリアノ・メルガル（Mariano Melgar）リカルド・パルマ（Ricardo Palma）リカルド・ロスセル（Ricardo Rossel）

テリー　一　エドゥアルド・デ・ラ・バーラ（Eduardo de la Barra）

ボリビヤ　一　ベンハミン・ブランコ（Benjamin Blanco）

アルゼンチン　一　クラウディオ・マメルト・クエンカ（Claudio Mamerto Cuenca）

ウルグワイ　一　フランシスコ・アクーニャ・デ・フィゲロア（Francisco Acuña de Figueroa）

『舶来すみれ』の「緒言」一三頁はスペイン語、スペイン文学、ラテン・アメリカ文学、ラテン・アメリカの詩に関する論文となっている。

当時、スペイン語諸国の文化について、ほとんど知られていなかったわが国にとって、この一三頁の説明は先駆者的な意味を持つかもしれない。

ただし「文学を専業として衣食する能わざる『いすばの、あめりか』の文士は貧家の門より出づること稀なり。況んや教育は下層社会に普及せざるに於てをや。従って文士たるものは中流以上の階級に属し、或は政治家たり、或は官吏たり、或は弁護士たり、或は新聞記者たるものが本職の余暇に筆を執るを多しとす。これその長篇物を出すことの尠少なる理由にして、小説劇曲よりも寧、短篇の詩を作り、散文の作物よりは更に多量の韻文作物を産するなり……」といい

うような見当違いと思われても、しかたのないような部分もある。スペイン文学ないしラテン・アメリカ文学の本格的な研究がまだ行われていない当時としてはこれもやむを得ないであろう。

『舶来すみれ』が出版された明治三十六年はバイロンが翻訳されだしたころであり、明治三十年代といえばハイネ、ゲーテ、シルレルらの訳詩集が相次いで世に現れた年代である。いわゆる大陸の訳詩の影響が考えられる年代でもあった。英詩については、明治前半期にでも、相当英語をこなせる人が比較的多かったので、原詩を「翻訳」を介せずに読めたと解される。しかし、その他のヨーロッパ語で書かれた原詩をそのまま読みこなせる人は極めてすくなかったといえよう。まして、スペイン語による詩は甚だ珍しかった。『舶来すみれ』が現れたのはこのような時代であった。

しかし、ラテン・アメリカの訳詩集が多くの読者に深い感銘を与え得るかどうかは別問題だったので、『舶来すみれ』は自費出版の形式をとらざるを得なかった。

これが出版されるに至った経過を訳者自身の書簡[8]から見ることにする。

「舶来すみれを出版した美育社は黒田湖山（本名直道）と赤木巴山（本名久太郎）の二人が明治三十四年に組織したもので両人ともに文士が本業でしたから金儲けに甚だ縁遠い小さな新出版書肆に過ぎませんでした。

黒田湖山は私と同時に早稲田専門学校文学科に入学しました。私は僅々三カ月で退学しましたが、相互の友情は黒田が亡くなるまで三十年以上も続きました。

その関係で私の最初の二詩集は任地リマから原稿を黒田に郵送して美育社から出してもらいました。これは二回ともに私の自費出版でした。第三の出版が舶来すみれでそれと続いて出した詩集瓜の蔓との二は美育社の出版でしたが、ただ私は出版の費用を出さなかったというだけで別段出版の為めの契約書なども作成せず従って印税の事など双方何も言わず二百部（であったと記憶します）の内五十部だけを私が貰って全部帳消にしたように思います。

黒田湖山は小波（又は漣山人）と同じ近江国生れで巖谷小波をたよって上京しその弟子となりビワ湖に因んで湖山人と

号し小波先生の麹町の宅に寄寓しそこから専門学校に通っていました。私の詩集瓜の蔓に小波先生が序文を書いて下さったのはそんな関係からです。

赤木久太郎君は岡山県の出身で某小説家の門人となって専ら散文の著作をし美育社は同君唯一の出資に成っていましたが美育社は喰込む一方で立ち行かず数年にして同君は郷里に退き美育社はつぶれてしまいました。赤木君の号は巴山、私の最初の詩集短篇長鞭の後部には巴山人の短篇小説船唄と湖山人のやはり短篇小説雲無心とが載っています（中略）舶来すみれは初版だけ二百部ぐらいで版は重ねませんでした」

以上のように当時の文学青年の友情から出版されたことと部数が非常にすくなかったことがうかがわれる。

訳者が早稲田の門をくぐったことがあることから『舶来すみれ』の序は逍遙が筆をとっている。訳出された詩は次の通りである。

Francisco Acuña de Figueroa:

El ramito anónimo.（名の花束）

Manuel Acuña:

Entonces y hoy.（今　昔）

Ante un cadáver.（屍骸の前にて）

Nocturno.（悲　歌）

Clemente Althaus:

A un cóndor enjaulado.（籠中の「コンドル」に）

Julio Arboleda:

A Beatriz. (ベテトリースに)

Eduardo de la Barra:

Such is life! (人生はかくこそ)

Pasión. (熱　情)

Andrés Bello:

Diálogo. (対　話)

Benjamin Blanco:

A un canario. (かなりやに)

Manuel Nicolás Corpancho:

La estrella de la tarde. (夕の星)

La hamaca del jardín. (庭の吊床)

Claudio Mamerto Cuenca:

El africano (亜弗利加人)

Ignacio Rodriquez Galván:

¡Adiós! (永　別)

Gregorio Gutiérrez González:

En el cimenterio de Sonsón. (ソンソーンの墓地にて)

¿Por qué no canto? (何故われは歌わぬか?)

Domingo Ramón Hernández:

El sueño de Blanca.（ブランカの夢）

José María Heredia:

El Niágara.（ニャーガラ）

Vuelta al sur.（南　帰）

Numa Pompilio Llona:

A un poeta.（ある詩人に）

La dicha humana.（人間の幸福）

Mariano Melgar:

Elegia（哀　歌）

Yaraví（ヤラビー）

José Milla:

A mi hijo.（はじめての誕生日にわが子に与うる）

José Joaquin de Olmedo:

En la muerte de mi hermana（わが妹の死にける時）

Ricardo Palma:

Ofrenda.（供　物）

¡Todavía!（いまとても）

Juan de Dios Peza:

A mis hijas.（わが女等に）

Antonio Plaza:

Así.（その如く）

Joaquín Quintero:

A una fuente.（泉流に）

Cantares.（雅謳歌）

Los últimos instantes de mi hijo Lino Clemente.（わが子リノ・クレメンテの臨終）

Ricardo Rossel:

La lechera.（ちちうり）

Los amigos y las aves.（友と鳥）

これらの訳詩は近代詩らしい体裁で訳されており、疑問符、感嘆符、省略記号も使用されている。中には七五調による訳詩もあるが、途中で七五調の調子が破れたり、不統一なものも見受けられる。

日夏耿之介氏は「……全く詩壇からは一顧もせられなかったが、直訳流と不文とが災したので今はその珍奇を珍らしむるにとどまる一書である」[4]と評しているが、この批評が当っていないとはいえないこともない。

スペイン語による詩の作詩法（versificación）について知識を有するものは皆無といっていい時代に、今村氏がこれに通じていたことは注目に価するであろう。

例えばリカルド・パルマの「供物」のはじめに「押韻は対連法（パレヤドス）により一と二、三と四に韻字を連ぬ」と説明している。

ここにいう対連法（パレヤドス）とは Pareado のことであろう。

その次の詩「いまとても！」の説明では「アソナンテ」を字母整韻法と訳している。また破脚（pie quebrado）などの簡単な説明も見られる。スペイン語による詩の作詩法に関する最も古い文献の一つとしても『舶来すみれ』は貴重であるといえよう。

日夏耿之介氏の批評にかかわらず、面白く訳されているのもある。

「ちちうり」（La lechera）はその一つであろう。今村氏はこれについて「この詩の傑作なるは巧にちちうり女の風俗を活写して眼前之れを観るが如き思あらしめ、且俗語を混用せる点にあり。前後二節よりなれど茲には前節のみを訳しつ」と解説している。

里馬の都市の入口を
冬とて夏とて変り無う
野末の花を見た様に
清らに嫣然うれしげに
牛乳売る女通るなり、
年が年中かゝさずも。

（中　略）

さてこの荷物の負ひ役は
毛をば奇麗に刈り込むだ
お馬よ、さてもその馬は
いつもかはらず足早に

小股にかけるが習慣。

このように七五調で訳されており、この訳詩全体に天真爛漫な味があり愛すべきものとなっている。

年増の黒女銅色人奴
さては混血種の「サムボ」どの
鍋か湯沸器か汁碗か
茶碗か甑をおつ取つて
かけ出して来てさて問答――
『どつさり牛乳をまけるんだよ、子――。』
『イエ〳〵どうして、飼料が高うて。』

というように会話体で訳している部分もあるが、この原詩がいまのところ発見できないために、それと対比的に論ずることは不可能である。

『舶来すみれ』の訳詩と原詩とを対比できるものに次の詩がある。

Nocturno (Manuel Acuña)

¡Pues bien! yo necesito
decirte que te adoro,

『舶来すみれ』の成立

『舶来すみれ』の成立

decirte que te quiero
con todo el corazón;
que es mucho lo que sufro,
que es mucho lo que lloro,
que ya no puedo tanto,
y al grito en que te imploro
te imploro y te hablo en nombre
de mi última ilusión.

悲　歌

よしさらば！　われは欲りす。
われ汝を拝むと汝れに告げむことを、
あらむ限りの心をつくして、
われ汝を愛すと汝れに告げむことを、
わが苦悩することや多量、
わが啼叫することや多量、
最早しかく多量なるに耐えず、
汝に哀願する泣号の中に、
汝に哀願し且わが最終の、

空想の名によりてわれ汝に語ると。

マヌエル・アクーニャのこの詩は翻訳困難な詩ではあるが、余りにも直訳しすぎて、成功していないように思える。con todo el corazón を「あらむ限りの心をつくして」と訳しているのはいいとしても、es mucho……を「……することや多量」というに至っては詩的表現とはいい難いであろう。

今村氏がもっとも感銘を受けた詩人はリカルド・パルマであったようである。筆者が一九六〇年十一月東京で会ったときにもこの詩人について、力説されていた。

『舶来すみれ』では訳詩のまえに詩人についての解説があるが、リカルド・パルマに関しては六頁を割いて解説されている。

今村氏は明治三十四年七月四日、リマの図書館でこの詩人に会ったことを書いている。リカルド・パルマに請われて日本語の聖書を一冊贈呈し、かれからは Anales de la Inquisición de Lima（里馬教刑史略）を贈られている。

また、この解説では「余が雅号『敬天牧童』の四字は希伯来人種の特性たる敬虔の信念を発輝した、かの詩篇中の大部を占むる神歌詩人、イスラエルの王ダビデの幼時に由来して居るのである」と述べて「敬天牧童」の由来を明かにしている。

今村氏が直接会ったラテン・アメリカの詩人の中にはスペイン語諸国でもっとも早く俳句に注目したメキシコの詩人ホセ・ホアン・タブラーダ（José Juan Tablada）がある。

この会見については次のように書かれている。[5]

「また青年詩人ホセー、タブラダとはかれが日本に来遊せし以前に握手して数分間の談話をなすの栄を有せりきタブラダは頗、日本贔負の人にしてかれの詩集には『日本』及『菊の花』と題せる二篇の詩を載せありしことを記憶せり」

このような記述があるにもかかわらず、今村氏は全くこのことを記憶しておられず、筆者には「メヒコの詩人ホセー、タブラーダと対談したことについては今は何も私の記憶に残っていません」と手紙で回答しておられる。恐らく、タブラーダに日本の俳句、和歌について、話したことはなかったものと解していいのではなかろうか。

二二一頁の『舶来すみれ』という訳詩集は珍奇という以外に、日本の詩壇に影響を与えたものではなかった。しかし、タブラーダとの会見をはじめ、種々の意味で資料的には重要な意義をもつ文献であることは否定できない。

付記　本稿における今村氏（野田良治氏）の経歴などについては、筆者が同氏に会い（一九六一年十一月）確めたものをまとめたものである。なお、数すくない『舶来すみれ』の原本をお貸しいただいた衣笠梅二郎教授（同志社大学）に厚くお礼申し上げる。

註

① 今村氏とは野田良治氏のことである。明治三十一年メキシコへ赴任する直前、今村家の養子となった。明治四十年ペルー国リマ在勤中、野田姓に復姓するまでの十年間は今村姓を称していた。このため、この期間に出版した詩集『短笛長鞭』『青春の詩』『瓜の蔓』『舶来すみれ』は全部、敬天牧童今村良治となっている。

② 現在は東京都目黒区上目黒七丁目　駒沢住宅四一号の自宅でポルトガル語辞典の編纂に余念がない。

③ 一九六一年四月二日付

④ 一九六一年四月八日付

⑤ 『明治大正詩史　巻上』四〇四頁

『舶来すみれ』一八五頁

主な参考文献

『舶来すみれ』美育社　明治三六年三月、日夏耿之介『明治大正詩史　上・下』昭和四年一月

日本比較文学会編『近代詩の成立と展開』一九五六年十一月

Luis Alberto Sanchez: *Escritores Representativos de América II.* (Editorial Gredos Madrid 1957)

Martin de Riquer: *Resumen de Versificación Española* (Editorial Seix Barral Barcelona 1950)